

自治領

国際停戦監視団からの要請を受けて、私がこの地に降り立ったのは昨日の事だ。

なぜ私のような者が国際停戦監視団に呼ばれなくてはならないのか……という強い違和感が込み上げたが、これでもある程度の知識と経験を身につけて、この分野ではそれなりに認められる成果も出し、望むと望まざるとに関わらず知名度も飛躍的に上がってしまったのだから、これまでの人生では縁のなかった各方面からの接触が増えても仕方がない。

だからといって、なぜ私が占領行政に関わらなくてはならないのか、そもそも私の知識と能力を生かせる場所がそこにあるのか、私には疑わしかった。

今回の要請に関する大まかな内容は予め伺っている。

私も、自分の役に立てる場所があるのなら、その場へ赴いて自分の知識と能力を惜しみなく役立てたいと思うのだが、果たしてここにその様なものがあるのか、自分の目で確認してみるまでは信じられない。

昨日、軍の輸送機に詰め込まれてこの地に付いて早々、一冊の分厚い資料を手渡された。

そこには、国際停戦監視団の目的と、この地に停戦監視団が駐留するまでの経緯、そして現在の状況が大まかに説明されていた。

私はこれまでそういった国際情勢とか、歴史といった分野とは無縁の世界で生きて来たから、どちらかといえば苦手であった。

それ以前に私の現在の職業の関係上、世の中の出来事にも疎かったし、全く興味も関心も覚えなかったから、自然と大洋の孤島に置き去りにされた漂流者の様な状態になってしまっていたのだ。

その上、ここへ辿り着くまでに自動車や電車、飛行機を何度も乗り継いでいて、その間神経の休まる暇が無かったのだから、久々にまともなベッドで夜を向かえられるとなれば、蓄積した疲労から来る眠気に呆気なく支配されるのも致し方ない。

別に朝寝坊をしたという程でもなく、今し方軽めの朝食を済ませた所なのだが、一晚柔らかなベッドの中で睡眠をとっても回復しない疲労の影響なのか、何となく頭の中に霧がかかった様に意識が朦朧としていて、何をするにも動作が緩慢となってしまう。

「そういえば、九時に迎えに来るといつていたっけ……」

昨日私を出迎えてくれた停戦監視団の職員は、確かそう言っていたと記憶している。

無造作に壁に掛けられている時計の針は、九時五分前を示している。

別に街中へ出かける訳ではないのだから、派手にめかし込む必要はないし、逆に汚れたり埃に塗れる可能性もある以上、そういった努力が全く報われなくなるケースもありうる。

とはいえ、これから見知らぬ他人と対面する以上、最低限の身だしなみは整えるべき……と、慌てて慣れない化粧を始めた所、背後の扉をノックする乾いた音が室内に響いた。

反射的に壁掛け時計に視線を向けると、ちょうど九時になった所だった。

——なんて時間に正確なんだろう……これも役人だから？

「リード博士、お迎えに上がりました」

扉越しに聞こえてくるのは、昨日私をこの宿舎まで送り届けてくれた男の声だった。

「はい。申し訳ありませんが、五分だけ待っていただけますか？」

私は男の声に答えると、慌てて化粧の続きを済ませてしまう。

衣服はモノトーンのコットンパンツに飾り気の無いシャツだったが、別にこれから遊びに行く訳ではないし、これならオフィシャルな場面でもそれ程失礼ではない。

本当はいつもの様にジーンズの方がしっくり来るのだが、ここの状況も分からないいうちは控えた方がいいだろう。

三分で身支度を整えると、ソファにほうりっ放しになっている愛用の帆布製のバッグの中身を確認し、昨日受け取った資料の束を詰め込んだ。

女性が普段持ち歩くには無骨なデザインだったが、耐久性と実用性には優れているので、調査で外出する際は常に持ち歩く私のお気に入りであった。

「お待たせしました」

戸口の脇に立っていた男は無表情であった。

約束通りに迎えに来たというのに待たされた事を咎めるでもなく、待たされた事に苛立ちを見せるでもなく、まるで人の皮を被ったロボットでもあるかの様に、ピクリとも表情が変わらない。

パッと見はまだ三十代前半といった所だろうか。

顔つきも整っていて、端正という表現がうってつけの男だ。

しかし、人間性の欠片も感じられない冷酷なまでの鋭い眼差しは、男の印象を十〜二十も年かさに見せていたし、人の不安感を掻き立てるに十分な要素だった。

第一印象で他人にネガティブなレッテルを貼るのはいい趣味とは言えないが、少なくとも私にとっては好きなタイプではなかった。

「では、これから国際停戦監視団南部方面事務局へご案内いたします。リード博士には、まず南部方面事務局長に面会して頂きます。そこで今回博士を招請した事情や目的についての説明を受けていただき、その後に実際に自治領の視察をお願い致します」

「自治領の視察？」

「はい。詳しい説明は事務局長からあるでしょうが、やはり博士には実際に現場を見て頂く方が良いというのが、我々の考えです。ところで、昨日お渡しした資料には目を通して頂けましたか？」

「いえ……昨日は疲れていたものですから……」

「分かりました。では、これから事務局へお送りする間に、私が掻い摘んで説明致します。事務局長との面会の際にもその資料に関連する説明がありますので、予め概要をご理解頂いた方がよいでしょうから」

「はい」

「でしたら、今日の視察が終わってからでも、明日以降でも構いませんが、資料には一通り目を通して頂く様、改めてお願い致します」

男の後について宿舎を出ると、既に宿舎前のロータリーに黒塗りの高級車が、搭乗者の

到着を今や遅しと待ち構えていた。

男のエスコートで始めて乗る高級車の座席に、私は居たたまれない気持ちでそわそわとしていた。

しかし、そんな年甲斐も無く子供じみた私の仕草にも全く関心が無いのか、もしくは努めて職務に徹しようと自分の身を律しているからなのか、男は眉一つ動かす気配が無い。

そして無感情に、

「では、事務局に向かいます」

と告げると、自らハンドルを操っていた。

昨日ここに到着した頃には日も落ちていたし、軍用輸送機を降りてからそのまま宿舎に直行したから、町の様子を見る暇も無かったのだ。

宿舎を出て一般道に出た段階での印象は、緑が殆ど無く、一面が黄色い砂埃に覆われた不毛の大地……というものだった。

人通りも余り無く、過疎化が進んで朽ち果てた西部の片田舎……そんなイメージがピッタリ来る土地だった。

別にここは砂漠の真ん中ではないし、乱開発で自然が損なわれたという様子でもないのに、ここまで緑や生命の気配の感じられない土地も珍しい。

あらゆる生命の繁殖を拒絶した荒野の中心に建物を建てた人工の町……ひと気が余り無いにも拘らず、どこか薄汚れてゴミゴミした印象を受け取ってしまうのは、この土地が本来人を受け入れるには適さないからなのだろうか。

「リード博士、よろしいですか？」

後部座席の窓から見慣れない光景に視線を漂わせている私に向かって、運転席の男が声をかける。

「……はい」

「では、お渡ししてある資料の内容について、掻い摘んでご説明します」

男の言葉に、私は愛用のバッグからそそくさと資料の束を取り出した。

「どうぞ、お願いします」

「それでは、まず資料の構成ですが、国際停戦監視団の目的について、それに続いてこの地に国際停戦監視団が駐留する様になった経緯について、最後は国際停戦監視団が活動を始めて以降現在までの状況の説明と、三部構成になっております。順番に説明しますと、国際停戦監視団の目的は、かつてこの地で勃発した地域紛争が再発しない様に、国際法に基づいた一定程度の強制力を行使しつつ監視する事にあります。ここで最初の地域紛争が勃発したのは、まだ国際連合が存在していた頃ですし、紛争への対応の是非を巡って国連加盟国間の反目が高まった結果、国連は瓦解したのですから、我々にとってもあちらにとっても、この地に停戦監視団を置いて予め紛争の勃発を回避する事が重要な訳です。ちなみにこちらは南側に停戦監視団の事務局を置いておりますが、あちらは北側に同じく停戦監視団の事務局を置き、相互に連携を取りながら紛争回避に尽力してきました」

「あの、ここで紛争が勃発したのは五十年くらい前の事ですよね。それをなぜ今までこ

の様な形で……隔離する必要があるのですか？」

「それは、紛争勃発から終息までの経緯と、その間……もしくはそれから現在までの国際関係の変化と無縁ではありません。それから、まさに我々が今回博士を招請した理由も関連しております。一言で言うと、『彼らはトラブルメーカー』だったのです。同族間の内紛に他国を巻き込み、いつの間にか多国間紛争を引き起こす原因となってしまう……彼ら自身にはその意識が無いのかもしれませんが、結果としてそういった紛争が立て続いた時期があったのです。結局それがきっかけとなって、国連による国際的な安全保障体制は崩壊しました。博士もご存知の通り、現在では環太平洋国家を中心とした『海洋国家連合』と、ユーラシアの大陸国を中心とした『ユーラシア同盟』に分裂してしまいました。しかし、幸いな事に現在の『海洋国家連合』と『ユーラシア同盟』の関係は悪くはありません。互いにバランスよく住み分けが出来ていて、利害対立も交渉で解決出来る環境が整って参りました。この十年は、新たな国際紛争の勃発もありません。多分、我々はこのまま戦争という人類最悪の惨劇を克服する事も不可能ではないでしょう。しかし、この自治区の存在だけが喉に刺さった魚の骨となっております。我々もいつまでもこの状態を維持する事が良いとは考えておりませんが、停戦監視団を引き上げて彼らを国際社会に復帰させた場合、再びかつての過ちを繰り返すのではないかと……現在は概ね良好な『海洋国家連合』と『ユーラシア同盟』の関係が、新たな不確定要因の発生によって崩れてしまうのではないかと……我々が懸念するのはそこにあります」

「ごめんなさい。私は歴史が専門ではないし、その部分については学生時代に身に付けた知識しか頼るものがないのですが、確かキム某……とかいう独裁者が様々な国家犯罪に手を染めていて、更には核開発を始めてしまったのが原因なのではなかったかね？」

「はい。その辺りの歴史的な経緯の詳細については、お渡しした資料に簡潔にまとめてありますから、後ほどでもご覧下さい。そろそろ事務局庁舎に到着します」

男の言葉に正面を向くと、フロントガラス越しに巨大な壁が立ちはだかり、唯一設けられた正門にも、銃を抱えた複数の警備兵が厳重なセキュリティチェックを行っていた。

こういった光景を目の当たりにすると、『ここは戦場なのだ』という思いが頭をもたげ、自然と緊張感が全身にピリピリと伝わってくる。

正確に言うと戦場ではないのだが、『停戦監視団』が駐留している以上、かつてこの地で勃発した紛争の決着は未だついてはいないのだ。

「直接事務局長の元へお連れする様に申し付かっておりますので、事務局長室へ向かいます」

正門のセキュリティチェックを難なく終わると、男は再び黒塗りの高級車を操って『国際停戦監視団南部方面事務局』の幾つもの建物の間をすり抜けていった。

これまでの私には縁の無かった、知らない世界。

そんな、国際舞台の最前線で指揮をとる事務局長とはどのような人物なのか、私は微かな不安を感じていた。

——私を迎えにきたこの男の上司なのだから、更に話し辛そうな相手なのだろうか……。

＊

「リード博士ですね。私は国際停戦監視団南部方面事務局の局長を任されております、トッド・ニコルソンです」

「はじめまして、エレナ・リードです」

局長と名乗った初老の男は、笑みを浮かべながら、私に手を差し出して握手を求めてきた。

特別に愛嬌があるとか、魅力的だといった部分がある訳でもない、ごく普通の人なのだろうが、私を迎えにきた男にはそういった部分が皆無だったから、逆に際立って感じられたのだろう。

「この度は遠路はるばるご足労頂き、まことに恐縮です。ごゆっくり……といってもこんな場所ですから、碌に寛げる所もありませんが、ご高名な博士のお力をお借りして一刻も早く問題の解決に導きたいと思いますので、何卒ご協力お願い致します」

「お気遣いありがとうございます。私は普段から森の中やジャングルにも頻繁に足を運んでおりますし、大抵の場所には適応出来る自信もありますので。……とはいえ、この辺りは緑が余り見られない様ですので、それだけは少々残念ですね」

「……まあ、一旦は焦土と化した様な場所ですから。博士もなぜこの様な所にわざわざご足労頂いたのか、ご理解頂けていない面もあるでしょうから、暫しお時間を頂戴してご説明させて頂きたいと思います。……その後、午後からでも、早速現状をご覧頂いて、博士の見解をお聞かせ願えればと思うのですが」

「はい。その旨は予め伺っております」

「では、よろしくお願い致します。どうぞ、こちらへお掛けになって下さい。……クサカ君」

ニコルソン局長は私を応接セットのソファーに招き入れると、あの無表情の男に声をかけた。

——あの人はクサカさんというのか……。

「はい、局長」

「リード博士に何かお飲み物を用意して差し上げて。それから君は午後からの視察の準備を頼む」

「承知致しました」

クサカと呼ばれた男は、そのまま軽く会釈をすると局長室を後にした。

入れ替わりに、今度はシックなビジネススーツを身にまとった女性が、私と局長に鮮やかなグリーンの飲み物を用意してくれた。

「日本産のグリーンティを冷やしたものです。ここからでしたら日本もすぐ近くですし、グリーンティは私の好みでもありましてね。お口に合いますかどうか……」

ニコルソン局長が、先に自分の目の前のグラスにシロップを入れて味をつけてから口を

つける。

グリーンティの本場日本では、わざわざ糖類で味付けなどをしないで、苦味のある自然のままの味を楽しむのだそうだ。

しかも、暑い夏場でも温めて飲むのだとか。

さすがに夏場のホットティは遠慮したいが、局長の様にグリーンティに糖分を入れるのも好きではなかった。

私はそのままグラスに口をつける。

さすがにアイスティにすると香りは弱まってしまうが、一口舌に馴染ませただけでかなり良い茶葉を使用している事くらいは分かる。

ただ苦いというのではなく、変に後を引かないまろやかな苦味だったから、寝起きから今まで何となく朦朧としていた頭の中が、すっきりとした心地よい爽快感に包まれてゆく。

「良い茶葉ですね」

「分かりますか……せっかくの良い茶葉なのだから、砂糖で風味を殺すとはもったいない……と言われるのですが、私はこれがないと駄目でして」

「それは人の好みですから」

「そうですね……では、本題に入りましょう。博士には昨日クサカから資料をお渡しして、ご覧いただいていると思いますが……」

「申し訳ございません。昨日は疲れて眠ってしまったものですから、まだ資料には目を通していないのです」

「そうでしたか。こちらが無理を申し上げてお越し頂いているのですから、これ以上の無理を申し上げる訳にもいきません。では、これから博士にお越しいただいた理由についてご説明致しますが、資料についても一緒に掻い摘んでご説明致しましょう。ただし、出来ましたら数日中には一通り目を通していただくよう、お願い致します」

「承知致しました」

「では、最初に博士にお越し頂いた理由を率直に申し上げます。現在、自治領内で我々の理解を超える事態が発生している様なのですが、未だ原因や対処法の特定が出来ておりません。そこで、各方面の専門家を当たって調査を行った結果、博士の専門分野の知識がヒントになるのではないか……との見解がありまして、一度博士に現場を視察して頂く事にしたのです」

「我々の理解を超える事態……とは、一体どういう事でしょうか？ 具体的にご説明頂けますか」

「現時点で確認している主な現象を一言でまとめれば、『自治領の住民は退化しているのではないか？』という事です」

「退化……ですか」

「はい。我々が現在確認している症状は、学習能力の低下、記憶力の低下、モラルや社会性といった人間社会を構成する為に不可欠の要素も欠落しております。一方、動物的な攻撃衝動が強調され、しばしば内紛が発生しております。尤も、内紛自体はこれまでも度々

発生しており、我々の監視活動を継続する理由ともなって来たのですが、年を経るに連れて内紛の質的变化が起こっている事に気付いたのです」

「質的变化……ですか」

「以前は自治領内での政治的主導権を巡った争い……幾つかの派閥が徒党を組んで、対立派閥との抗争に明け暮れる……といったものが大半を占めていたのですが、現在では本能的な攻撃衝動の赴くままに暴れ回る……といったケースも増加しております。我々停戦監視団は、『彼らが内紛に他国を巻き込んで多国間紛争の原因とならない様に監視する』のが目的ですから、自治領内部の事象については極力関与を避けて参りました。当初は拙いながらも自治領内部の自治が成り立っていたのですが、この所自治領の住民だけでは自治が成り立たなくなってきました」

「あの、お話中失礼します。私にはどうも話の筋が見えないのですが。そういった問題でしたら私など門外漢ですし、社会学者や政治学者、心理学者、医者など、もっと適切な知識を持っておられる方が幾らでもいらっしゃると思います。そういった方々に聞かれた方が……」

「もちろん、今博士が上げられた様な方々には既にご協力頂いているのですが、それに加えて博士にもご協力を頂きたいと考えております」

「そうはおっしゃいますが、私の専門は動物行動学ですから……」

「はい。承知しているつもりです。サルの行動に関する博士の論文も取り寄せて読ませていただきました。その上でこうしてご協力をお願いしているのです」

私が根本的な勘違いをしているのか、それともニコルソン局長が私を買い被っているのか、もしくは私をからかっているのかは分からないが、このまま話を続けても延々と水掛け論のまま両者の見解は平行線を辿りそうだ……という事だけは、臆気ながら理解できた。

それにしても、国際機関現場責任者ともあろう人物が、人をからかう為にわざわざ遠方から招請する訳もない。

では、なぜ動物が専門の私に対して、自治領の住民についての意見を求めるのだろうか？ 私の口元から無意識のうちに溜息が漏れる。

しかし、目の前のニコルソン局長は相変わらず落ち着き払ったまま、まるで私の戸惑いを『予め想定していた』とでも言わんばかりの表情を浮かべている。

「我々は長年に渡って自治領の監視を続けて参りました。それは国際社会の平和と安定を維持し、また自治領の住民が自らの力で国際社会との共存を可能とする為の『目覚め』を待つという、先の見えない遠大な計画に基づいておりました。もちろん、この様な形で特定の民族を世界から隔離する行為に対して、当初は人権上の問題なのではないかという声もありました。しかし、世界の多くの国々の判断は、『基地外に鉄砲を持たせる訳には行かない』というものでした。かつて世界を多国間紛争の連鎖に巻き込んだキム某という独裁者は、それだけの犯罪行為を行ったのです。当初、『諸悪の根源は独裁者キム某を中心とした指導者層だけだ』と考えられておりました。『キム某を失脚させれば、国際秩序は安定化に向かうのだ』と……。国家の指導者が主導して麻薬や偽札を製造し、世界中か

ら一般庶民を拉致し、外交交渉の手段としてミサイルを紛争相手国でもない他国の領海に向けて発射し、果ては核兵器の開発にも成功してしまう。そういった周辺諸国にとって危険極まりない国家の存在は許されない……多くの国家は切実な危機感を持ってこの事態を受け止めました。中にはそういう意見には与しない国家もありましたが、そういった一部の国家においても、名目上はキム某の独裁国家『北』に対して厳しい非難の声を上げていたのです。当時の詳しい経緯の説明は省きますが、キム某の排除については各国とも同意し、六十年に渡って続いたキム父子の独裁国家は遂に終焉を迎えました」

ニコルソン局長は一旦話を区切ってグリーンティで喉を潤すと、一呼吸置いて再び口を開いた。

「しかし、混乱は独裁者キム某の排除だけでは納まりませんでした。WW2以降、彼らの民族は『北』と『南』の二つの国家への分裂を余儀なくされるという悲哀を味わい、また当時の国際情勢から互いに反目せざるを得なかった訳ですが、独裁者キム某が排除された時、『北』と『南』の関係は飛躍的に改善されておりました。国家ぐるみの様々な犯罪行為を繰り返してきたマフィア国家『北』に比べて、『南』は従来それ程危険視されてはおりませんでした。言論統制と粛清を旨とする共産主義を標榜する『北』と比べて、『南』は曲がりなりにも言論の自由が保証された民主主義国家でした。かつては軍政が国家を主導するという暗い時代もありましたが、経済の著しい成長に連れて自由選挙の保証された民主主義国家への脱皮を図りました。その目覚ましい発展の度合いは、WW2の折に国土を徹底的に破壊されたドイツや日本の奇跡的な復興にこそ及びませんが、WW2以後に成立した国家の中では随一の成長国と考えられていたのです。その『南』が、反目する『北』との関係改善に乗り出した時、『南と北の関係が改善すれば、新たな紛争の原因が一つ減って、周辺地域の安定に寄与する』と歓迎する声上がる一方、『南北融和といっても北主導では安全保障上の懸念が増す一方だ』という不安の声も上がりました。国内経済が破綻状態で最貧国にも数えられた『北』と比べて、『南』は経済大国の称号を射程圏に入れていたのですから、『北』の独裁者にとっては是非とも手に入れたい資金源でした。『北』は民主主義国家『南』の自由言論という特性を巧みに利用し、『南』に放ったスパイを通じて『親北』『民族主義』の方向へ世論を誘導しました。『親北』で『南』の『北』に対する敵愾心を失わせ、『民族主義』を煽って『北主導の南北統一』を認めさせようと画策しました。が、そういった『北』の工作が実を結ぶ前に『北』は暴走して瓦解し、『南』に吸収合併されました。これで全てが終わったと、世界中の誰もが思ったのです。しかし、『北』が『南』に蒔いた偏狭な『民族主義』の芽は、『南』の中で不気味な形で急成長していたのです。当時の『南』の指導者は、瓦解寸前の『北』が犯した犯罪行為に悉く目を瞑り、なおかつ『北』に対する莫大な経済援助を続けていた為に、『北』の傀儡だと揶揄されましたが、まさに『北のスパイが南の指導者となった』様な状況でした。ですから、名目上瓦解したかに見えたマフィア国家『北』のDNAは、実は『南』に受け継がれていたのです。……否、元々同じ民族なのだという方が正確なのかもしれません。『北』の独裁者キム某が生み出した悪しき遺伝子が密かに『南』に伝播し、『南』が『北』を飲み

込んだ所で、実は内部から『北』に占拠されていた……という構図です。」

私は、いつ果てるとも無く延々と続くニコルソン局長の話に耳を傾けながらも、半ばウンザリとしていた。

この人は話し好き……というか、演説が好きなタイプなのだろう。

自分の話がリズムに乗って来ると、聞き手の反応を度外視して立派なご託宣を述べる自分自身に酔ってしまう……そういった類いの人なのだろう。

これから自分が委ねられる作業に関連するのだから、要点はきっちり把握しておかなくてはいけないと思うのだが、こう立て続けにまくし立てられては、話の内容に関わらず意気阻喪してしまう。

が、そんな私の思いには関わり無く、ニコルソン局長の話は尚も続く。

「以降、彼らは主に日本の主権を度々侵害し、周辺諸国を巻き込んで紛争の原因となった為、国際連合の解体後に成立した『海洋国家連合』諸国は武力制裁を行ないました。一方『海洋国家連合』とほぼ同時期に成立した『ユーラシア同盟』諸国は、武力制裁については中立を保ちましたが、制裁後の半島を『海洋国家連合』が占拠する事については反発を見せた為、半島自体を中立地帯として外界から隔離し、共同で設立した『国際停戦監視団』が中立地帯の管理を行うという手法が取られました。とはいえ、実態は自治領のこちら側……つまり南部を『海洋国家連合』が、北部を『ユーラシア同盟』が管理しております。世界の二大安保機構が接触しては軋轢も大きくなりますし、ましてやここは曰くつきの紛争地域ですから、中立地帯を設けて双方の共同統治にするという手法は、双方の利益にも叶っていたのです。それに、この自治領の共同統治を通じて、『海洋国家連合』と『ユーラシア同盟』の意思疎通が積極的に図られた結果、両者の関係改善に大きく寄与したという副産物もあります。ですから、一概に現在の状態が良くないだけでも言い切れません。が、今や世界の紛争は撲滅を目前に控えております。この自治領の問題さえ片がつけば、我々国際社会は過去の厄介な問題から開放されるのです」

「つまり、停戦監視団の目的は、自治領が民族自決の原則に基づいて主権国家として自立し、かつての様に内紛に他国を巻き込んで国際紛争の原因とならない様、国際社会と協調する為の基盤整備をするという事でよろしいのですよね」

「その通りです。当初は自治領の住民の自覚を促す為、我々は極力介入を控えて来ました。しかし、彼らは自立と国際協調に意識を傾ける所か、自治領の中が世界の全てだと勘違いでもした様に、相変わらず内輪での派閥抗争に明け暮れました。その様な状態では日々の食料にも事欠く状態に陥るのも必然ですが、自治領内への食糧援助も人道上考慮される最低限に留めました。甘やかしてばかりいても彼らの自覚を促せない……という考えからです。しかし、そういった我々のこれまでの取り組みは誤っていたのではないかと、ここに来て全面的な見直しを図る必要性を感じております。現在の我々にとっては、自治領の住民が本当に我々と同じ人類なのかという疑いを抱いてしまいます。我々は自治領という巨大な動物園の管理人で、かつては人であった動物の世話をしている……そういった錯覚に囚われてしまうのです。妙な誤解を受けない様に一応お断りしておきますが、決して、

民族主義的な差別意識から申し上げているのではありません。博士も実際に現場をご覧になれば、私の申し上げる言葉の意味がお分かりになるでしょう」

＊

ニコルソン局長の意味深な言葉には密かな不安を感じたが、その原因について充分吟味する時間も与えられないうちに、いよいよ自治領の視察に出発する時間が訪れた。

メンバーは私と、今朝も迎えに来たクサカさんという無表情な男、それにシェさんという通訳と、二人の屈強なボディガードという面々であった。

クサカさんに連れられて、本日の視察の同行スタッフと面会した時、私は、
「よろしくお願いします」

と何気なく挨拶をしたのだが、スタッフの面々はクサカさん以上に無愛想という、かなり疲れそうな人ばかりであった。

「この者達に気を使う必要はありません」

クサカさんはそう言うが、私の立場で見れば、屈強な男二人を含む四人の無愛想な男に囲まれるというのは、余り気分の良いものではない。

ただでさえ慣れない土地に足を踏み入れたばかりで、いつの間にか決められた予定をこなす様に強いられていると言うのに、気分転換に雑談を交わす事さえ許されないというのだ。

別に予め『雑談をしてはいけない』と言い含められた訳ではないので、こちらから話を振れば応じてくれる人もいるかもしれない。

しかし、この場に漂う独特の重苦しい雰囲気、私の『下らない雑談を交わす』意欲さえも失わせる。

私達視察団は、大きめのワゴン車に詰め込まれて現場へと向かった。

停戦監視団の庁舎を出た車は、昼間であるにも拘らず閑散とした道路を、北西方面へとひた走っている。

そこら中に黄色い砂埃が絶えず飛び交い、町全体に黄色い雪が降り積もったと錯覚させるくらい、屋外の何もかもが薄汚れた黄色に染まっている様に見えた。

「博士、私達がこれから向かうのは、B-42 地区です。ここは比較的平穏な場所ではありますが、不測の事態に見舞われる可能性もありますので、充分注意して下さい」

車の窓越しに流れる景色に所在無く視線を漂わせている私に、クサカさんが事務的に告げる。

確かにニコルソン局長の話にも『自治領内の自治が成り立っていない』とあったから、それなりの覚悟を決めてきたつもりだ。

しかし、改めて『不測の事態に見舞われる』と念を押されたり、屈強なボディガードが随行するに到って、心の底から捉え所の無い漠然とした恐怖心が込み上げてくるのだ。

「不測の事態……ですか？」

「可能性としては少ないのですが、依然として不毛な派閥抗争を繰り返している者が、いつ紛れ込まないとも限りませんので。そういった物騒な者達はD地区やG地区に集中しているのですが、停戦監視団としても自治領内の移動まで禁じる訳には参りませんので……」

「なるほど。ところで、そのD地区とか、B地区とか、ここではそういった呼び方をしているのですか？ ～町……といった呼び方でなしに」

「はい。我々が自治領を設けた時点で、既に主だった町の多くは焼失しておりましたので、便宜的にそういった記号で区分けした呼び名が現在でも使用されております。当面の紛争が終結して、我々が自治領の隔離政策に乗り出した時には、半島全体が長期の戦乱に疲弊して焦土と化していたに等しいのです。一部の戦場では核も使用されましたし……。ですから、我々が第一に手をつけたのは難民救済策でした。避難民を救済する為の拠点として幾つものキャンプを設置し、そのキャンプに便宜上の記号をつけておりました。避難民はそのままキャンプに定住したまま、集落として成立してしまいましたから、旧来の地名を使用するよりも便がいいという側面はあります。それに、彼らの言葉に則った地名では使い勝手が悪いと言う側面もあります」

「核を……使用したのですか？」

「ええ。そういう記録が残っております。ただし、現在は放射能の影響も殆どないとされておりますし、今回博士に視察をお願いするのは、核攻撃を受けた場所からはかなり離れておりますので、その点のご心配は要りません」

クサカさんがそこで一旦言葉を切ると、いつの間にか前方の視界を遮る様に左右に向かって伸びる巨大な壁が、行く手に立ちはだかっている事に気付いた。

「これは……」

「自治領の入り口です。隔離政策を採っている関係上、自治領と外界との通行を制限する為に壁で覆い、厳重なセキュリティ・チェックを行っております」

セキュリティ・チェックと言っても、このゲートを通過するのは国際停戦監視団の職員か、私の様に国際停戦監視団から何らかの業務依頼を受けた者に限られていたから、それ程手間のかかるものではなかった。

但し、自治領と外部が明確に隔離される為に、携帯品の扱いについては幾つかの注意を受けた。

基本は『外部の物を自治領に持ち込まず、自治領内の物を外部に持ち出さない』事だ。

私は、森林やジャングルで動物の生態調査に当たる時に、常に持ち歩いていた愛用のバッグを今日も携帯しており、調査に役立つ小物類を常時バッグに放り込んでいたのだが、『自治領内に持ち込む物は予めチェックしておくか、ゲートに預けておく』というルールの為に、バッグごとゲートに預けざるを得なかった。

私はバッグからモバイルパソコンを取り出し、自治領内部の記録用として持ち込む事に決めた。

他の面々は元々国際停戦監視団の職員なのだし、セキュリティ・チェックの要領も心得

ている為か、余計な物は一切携帯していないようだった。

車がゲートを通過してしばらくしてから、ふとクサカさんが私に話しかけて来た。

「リード博士、もうすぐ B-42 地区に到着しますが、念の為にこれをお渡ししておきます。いざという時にはボディガードもついておりますし、それ程危険な事態には巻き込まれないとは思いますが、もし、博士が自治領内で我々と逸れてしまったり、何か身の危険を感じた時にご使用下さい。但し、自治領の住民を刺激しない様に、必要になるまでは服のポケットにでも隠し持っていた方が良いでしょう」

クサカさんから受け取ったのは、掌に収まってしまう程小型の銃だった。

護身用だろうか。

「私は、銃など使った事がないのですが、そんなに物騒な場所なのですか？」

「念の為です。この安全装置を解除すると引き金が引ける様になりますので、後はそのまま引き金を引くだけです」

「ですが……」

普段は銃などと全く無縁の生活をしているのだから、いきなり銃を手渡されても戸惑ってしまう。

だが、クサカさんにそう訴えても聞き入れられる見込みはないと判断した私は、諦めて銃を懷に隠した。

それから五分もしないうちに、目的の B-42 地区に到着した。

そこは、先程のクサカさんの話にもあった様に、町や集落というよりは難民キャンプと描写した方が、この場の状況を的確に表現出来ていると思う。

朽ちかけている木の柱や、所々に穴や裂け目の出来た布を使用して、当面の雨風を凌げればそれでよい……そんな、すぐにでも黄色い砂嵐に弾き飛ばされてしまいそうな俄作りの簡易テントが、無造作に何十、何百と建ち並んでいるだけの場所……それが、B-42 地区の全てであった。

テントの林立する区画を抜けると、雑草も殆ど育たない不毛の荒野が延々と続く。

クサカさんの話によれば、現在の半島の状況は『南』も『北』も然程変わらないのだという。

かつて朝鮮半島といわれた自治領一帯は、確かに元からそれ程肥沃な土地ではなかったらしいが、それでもかつては六千万を越える人々の生活を支えていたらしい。

しかし、土地の荒廃が進み、また同族間の内紛に明け暮れて生産活動を疎かにしてきたツケが回ったのか、今では自治領の住民は一千万に満たないかもしれない……と、クサカさんは淡々と語る。

「なぜ、このような状態を放置しているのですか？」

既に大まかな説明をニコルソン局長から受けていたといっても、実際にこの惨状を目の当たりにすれば、誰もがそう問い掛けたくなるだろう。

「これまでの歴史的経緯について学ぶのなら、きっと誰もが同じ結論に辿り着くと信じております。彼らに対する過剰な支援は、彼ら自身の為にならないのです。無論、人並み

の人道意識を持ち合わせている人であれば、ここの住民に哀れみを感じ、この状況を放置している停戦監視団に対する非難の声を上げて不思議ではありません。ですが、彼らをあくまでも甘やかさずに、自らの力で自分達の新たな国を築き上げる為の第一歩を踏み出すまでは、冷淡な様でも突き放して自立を促す必要があるのです」

クサカさんは珍しく声を荒げて抗弁した。

「この措置を講ずるに当たっては、かつての日本の経験が大きな影響を与えております。今から百五十年以上前の話ですが、日本がこの半島一帯を統治していた時代がありました。当時は欧米列強が世界中に植民地を抱えている帝国主義全盛期ですから、半島を併合するに当たって少々強引な面があったかも知れません。しかし、日本は自ら莫大な資本を投じて半島の近代化を推し進め、半島の住民は漏れなくその恩恵を受けたのです。が、日本がWW2で敗者になると、途端に掌を返して『植民地支配だ』などと騒ぎ立て、厚顔にも戦時賠償まで請求してきました。日本は戦時賠償こそ飲みませんでしたが、経済協力金という名目での経済援助を行なって、『南』との国交を結びました。国交を結ぶに当たって、『昔の事には全てけりをつけましょう』との約定を交わしたのです。しかし、『南』は尚も『本来なら日本が負担する道理の無い戦時賠償』を執拗に要求し続けたのです。そういった経験を通じて、日本は『半島に対する過剰な支援がいずれ仇となる』事を熟知しておりました。私が日本人だから……という事で、この様な話をしているのではありません。仕事に私情を差し挟む愚か者ではないと、個人的には自負しております」

「私は、歴史にはそれ程詳しくはありませんし、今のクサカさんの話に應える適切な言葉が思い浮かびません。こういう例えが適切かどうかは分かりませんが、過去の経緯はどうであれ、私達がまるで分からず屋の子供を教え諭す親の様な役割を引き受けてよいものでしょうか？ 私達はそれ程彼らよりも優れた人なのでしょうか？ 仮に、私達が彼らの親の役割を引き受けるのが正しかったとしても、彼らに対して厳しい姿勢で臨めばよい訳ではないでしょう。確かに親は子に対して厳しい態度で接する時もありますが、それが全てではありませんし、子供に対する深い愛情が根底にあるでしょう。もちろん、人間の親子関係をこの事例に当て嵌めてよいのかどうかは分かりませんが、親であれば何をするにしても子供の成長を促す為に行なわなくてはなりません。しかし、あなた方にはそれが感じられないのです」

「……この様な場所で余計な時間を取られる訳には参りません。次に向かいましょう」

暫しの沈黙の後、クサカさんはそのまま会話を打ち切った。

私が勝手に見当違いの事を言っていたのか、それとも核心を突いていた為に二の句を次げなかったのかは分からない。

が、一瞬感情を露わにしたかに見えたクサカさんの表情は、これまでも増して冷徹なロボットの様にも見えた。

「あの……」

言いかけてから、相手には『これ以上会話を続ける気がない』と感じた私は、そのまま口に出しかけた言葉を飲み込み、無言のまま先を行くクサカさんの背後に続いた。

最初にキャンプ地の外れまで歩いた時には気付かなかったが、引き返す際に改めて個々のテントに目を向けると、既に主を失って崩れかけた骨組みに、わずかな布切れがまとわりついているだけの残骸が意外と目立つ。

それに、幾ら未来の希望も見えない難民キャンプとはいえ、余りに人の気配に乏しかった。

通常、難民キャンプの大人は疲れ切っているとしても、その分活気に漲った子供の声がかそこかしこから聞こえてくるものだ。

しかし、このキャンプ地には無邪気にはしゃぎ回る子供達の声もなく、それどころか屋外に出ている人が誰もいない。

——まさか、このキャンプ地の住民は全て息絶えてしまったなんて事は……。

そんな筈はない。

もし、ここの住民が既に息絶えているなら、わざわざ視察にこの場所を選ぶ筈がない。だが、それにしても不気味に静まり返っていた。

一団はみな無言のまま歩き続け、ワゴン車を止めた所まで戻って来た。

「リード博士、住民と面会されますか？」

「住民がいるのですか？ 余りに静まり返っていたので、不審に思っていたのですが……」

「それは、ご自分の眼でご覧になられた方が良いでしょう」

クサカさんが答えると、通訳のシェさんとボディガードの一人に何事かを告げる。

二人は無言で頷くと、そのまま林立するキャンプの中に消えていった。

＊

「クサカさん！」

通訳のシェさんの手招きに応じて、クサカさん、私、ボディガードの男と続いて、とある簡易テントの前に辿りついた。

シェさんとクサカさんが二言三言小声で言葉を交わすと、そのままシェさんがテントの中に入っていく。

「リード博士、ここの住民が面会に応じってくれるそうです。何か住民に聞きたい事があったら、直接聴取してはいかがですか？」

個人的には色々と思う所があるのだが、当の住民は自身が現在置かれている状況をどう感じているのか、何か不満や要望はないのか……と言った部分は確かに気になる。

私が個人的な感情に基づいて傍から口を挟んだ所で、当の住民の意思と食い違っていては何の意味もない。

尤も、私がここを視察する目的は別の所にあるらしいのだが、そういった停戦監視団の思惑とは別に、ここの住民がせめてもう少しマシな生活を送れる様に動く事は出来る筈だ。

全ての人がそうだとは言わないが、未だにこの様な不自由な生活を強いられる人々を目

の前にして、せめて『自分の出来る限りの事はしてあげたい』と思う人は、きっと少なくはあるまい。

それは今の正直な私の気持ちでもある。

私は無言のままクサカさんに向かって頷くと、一足先にシェさんが入ったテントに足を踏み入れた。

薄暗いテントの中には、一人の女性が小さな子供を腕の中に抱えたまま蹲っていた。

その女性と通訳、そして私が入れば一杯になってしまう様な小さなテントで、この親子は暮らしているのだろう。

「リード博士、何か聞きたい事があれば言って下さい。通訳します」

「ええ」

私はシェさんの求めに応じて、しばし考えてからこう切り出した。

「こんにちわ。お加減はいかがですか？」

するとシェさんと女性が何事かを話した後、シェさんが翻訳をしてくれる。

「あの、もう少し食糧の配給を増やして欲しいと訴えています。育ち盛りの子供を抱えて、現在の量では足りない……」

「そうですか……。でしたら、『約束は出来ないが要望は伝える』と返答して下さい。ところで、二~三伺いたい事があるのですが、よろしいですか？」

私自身は出来れば何とかしてあげたいのだが、実際に食料を配給しているのは停戦監視団だ。

私が急遽停戦監視団から招請されただけの部外者である以上、そうとしか回答のしようがなかった。

が、女性は明らかに気分を害した様に声を荒げていた。

彼らの言葉を直接理解出来る訳ではないが、気分が高ぶっているからなのか、どこか呂律が回っていない様な、年端も行かぬ子供が片言で喋っている様に聞こえてしまう。

最初は元々その様な言葉なのか……とも思ったが、シェさんが何度も女性に対して聞き返す素振りを見せているから、やはり女性の言葉が聞き取り辛いのだろうと察した。

「博士、『こちらから質問したい』と伝えたのですが、『食料を増やしてくれ』の一点張りで……。『この前も言ったのに……』とか、『何度言っても聞いてくれない』とか、文句を言うばかりで、こちらの言葉に耳を傾けてくれません」

「そうですか。あの、この女性は言葉には訛りでもあるのですか？ 随分聞き取り難そうですね」

「訛りもそうですが、殆ど片言の様なものですから、余り複雑な内容の話をしようとすると聞き取り難くなります」

「自治領の住民は皆片言程度しか話せないのですか？」

「皆……という事はないと思います。でも、最近はまともに話せない人が増えた様に感じます。私もこの仕事を十年くらいやっていますが、年が経つに連れて酷くなっていると思います」

「そうですか。では、もう一度だけ聞いてもらえますか？ 『ここにはどの位いるのですか？』『お仕事は何をされていますか？』『（食料以外で）何か要望はありますか？』の三点なのですが……」

「分かりました」

シェさんが再び女性に向き直って、辛抱強くこちらの意向を伝えようとするが、女性は益々気分を損ねている様だ。

私には女性が何を言っているのかは分からないが、大げさな身振り手振りまで加えて執拗に何事かを訴えかけている……様に見える。

その様子を傍から眺めているだけで、このままではまともな会話が成立しない事が分かる。

決して恵まれた環境にある訳ではないのだから、様々な不満が蓄積しているであろう事は理解出来なくもないが、これ程一方的に自己主張を繰り返されるだけでは、聞き手側としても素直に聞く気にはなれない。

シェさんは、私の質問の返答を得ようと五分ほど粘ってくれたが、遂に匙を投げたのか、無言のまま首を横に振った。

「分かりました。諦めましょう」

私はシェさんに告げると、一足先にテントを後にする。

「リード博士、いかがでしたか？」

声をかけてきたのはクサカさんだった。

「ええ、『食糧の配給を増やして欲しい』といわれましたが、それ以外は全くこちらの話に聞く耳を持ってもらえませんでした。先程ニコルソン局長が『自治領の住民は退化しているのではないかと？』といわれた理由が、少しでも理解出来た様な気がします」

「言動も行動も、より本能的・動物的になっているのではないかと……というのが、自治領の住民に対する我々の正直な印象です。その原因が特定出来れば、もう少し対処のしようもあるのでしょうが……」

「シェさんにも聞きましたが、片言しか言葉を話せない人が増えているとか……」

「はい。教育に原因がある……と、当初は我々も考えましたが、学校教育の充実といった対策を施しても効果は上がりませんでした。それに、停戦監視団の基本方針が『彼らの自立を促す事』にありましたから、そもそも自治領の内政に対する過度の介入が慎まれた……という事情もあります。ですから、現在生じている問題の発覚が遅れてしまい、結果こちらの対処も後手後手に回っているのです」

「……でしたら、もっと深刻な状態の人もおられるのでしょうか？」

「お会いになりますか？」

クサカさんの思わぬ言葉に、私は返答に窮してしまった。

自治領の住民一人と面会したからといって、その時の印象が全ての住民に当てはまる訳ではない。

が、たった今面会した女性よりも深刻とは、一体どの様な状態に陥っているのだろうか。

興味が湧かない訳ではなかったが、むしろ未知なる者に対する漠然とした恐怖心の方が上回っていた。

しかし、実際に現場を視察した事によって、現在の自分に要求されている作業が臆気ながら理解出来た様な気がする。

個人的な感情よりも、職業上の責任感の様な意識によって、私はより多くの事実を目の当たりにするべきだと感じていた。

もし、仮に不測の事態が勃発したとしても、今ならば屈強なボディガードが退けてくれるだろう。

たった一人きりでこの難関に挑む訳ではないのだ。

「はい」

私は意を決して短く呟いた。

「わかりました。では、少々お待ち下さい」

クサカさんはそう答えると、再び通訳のシェさんの耳元で何事かを小声で囁いた。

シェさんは二度、三度と無言のまま頷くと、そのままボディガード一人を伴って一足早くテントの密集地帯へと分け入っていく。

「先に様子を見に行かせましたから、このまま後を追いましょう」

クサカさんに促されて、私達も少し距離を置いて二人の後を追う。

いわばキャンプ地の中心部とっていいテントの密集地帯には、すぐにも風に飛ばされてしまいそうな簡易テントだけではなくて、より頑丈な作りの小屋とってよい建物もかなり目立つ。

そんな小屋の一つに、シェさん達が一足先に入り、程なく私達を手招きで呼び寄せる。

「どこまでこちらの言葉が伝わっているか怪しいものですが、『視察をさせてもらう』と言うだけは言っておきました。すっかり大人しくしていますし、今なら問題はないでしょう」

シェさんの物言いはどこことなく不安を感じさせたが、今更後に引く訳にもいかない。

クサカさんはシェさんに向かって軽く頷くと、私に向かっていった。

「一応お断りしておきますが、『彼』を余り刺激しない様に、気をつけて下さい。我々も同行しますから滅多な事は起こらないと思いますが、いざと言う時の為に心の準備だけは置いて下さい」

「そんなに危険な相手なのですか？」

「いえ、普段はそれ程でもないでしょうが、我々との間に円滑な意思疎通が成り立たないのですから、些細な誤解からでも不測の事態は容易に起こり得ます。『窮鼠猫を噛む』という言葉をご存知でしょう？ 普段は大人しい草食獣でも、天敵に追い詰められて死の恐怖に支配されれば、どの様な反撃に転じるかは予測不可能です」

「別に私達は肉食獣の様に襲いかかろうと言うのでは……」

「問題は、果たして『彼』がそれを理解してくれるのか……という事です」

クサカさんは話を打ち切って、通訳と共に薄暗い小屋の戸口へ侵入した。

小屋の主である『彼』を刺激しない為に、体つきの大きなボディガードは小屋の外で待機する様だ。

もちろん、不測の事態が発生すれば、すぐさま小屋に突入して脅威を排除するのだろう。

「博士、『彼』は小屋の隅に蹲って大人しくしていますから、今なら大丈夫でしょう」
小屋の中から、私を招き寄せるクサカさんの声が聞こえてくる。

私は後悔とも嫌悪とも取れる吐息を漏らすと、自分の決断が誤りで無い事を願って薄暗い小屋の戸口を潜り抜けた。

途端に鼻腔の奥深くを刺激する不快な臭気に、思わず顔を歪めて口元に手を当てた。

始終風が吹いている屋外では気にならなかったが、壁で囲まれて空気のこもる屋内では、思いつく限りの様々な悪臭がない交ぜになったまま時間をかけて熟成された様に、口や鼻を閉じていても皮膚の汗腺から悪臭の毒気が全身に沁み込んでいく様な気分させられる。

腐った食料の臭いや、飢えた獣の臭い、長年に渡って蓄積されたありとあらゆる汚物の臭い……そんな様々な悪臭が複雑に交錯して、私の細胞の一粒一粒を恐怖と嫌悪感で泡立たせていた。

先に屋内に入っていたクサカさんとシェさんの二人は、やはりいたたまれぬ臭気の為か顔を歪めている様に見えたが、私ほど露骨に嫌悪感を露わにはしていなかった。

「博士、これが『彼』です。薄暗くて見辛いかもかもしれませんが、光を嫌がりますのでこのままでお願い致します」

『彼』は、とても痩せこけた男だった。

小屋の隅に小さく蹲って、全身を小刻みにガタガタ震わせたまま、細長く釣りあがった目でこちらを睨みつけていた。

かつてはまともな衣服だったのだろうが、今や原形を留めぬぼろ布の塊を僅かに身にまとい、どこか縋りつく様な、甘える様な、それでいて鋭い刃物の切っ先で傷つける様な、幾つもの感情がない交ぜになった視線をこちらに向けていた。

「こんにちわ。気分はいかが？」

私は努めて心の平静を装い、作り笑いさえ浮かべて眼前の『彼』に話し掛けた。

傍らのシェさんがすかさず通訳をしてくれるが、『彼』は相変わらず蹲ったまま鋭い視線だけをこちらに向けている。

「私達は、あなたのお役に立ちたいの。その為にどうすればいいのか知りたいので、お話を伺いたいんだけど……」

私は醜く引きつった作り笑いを浮かべたまま、『彼』の反応をしばらく待ったが、取り立てて大きな変化は無かった。

ただ、敢えて言えば、『彼』も時折口元を小刻みに動かして、何か話した気な素振りを見せている。

「さあ、言いたい事があるなら何でも言ってちょうだい。出来るだけの事はするつもりだから……」

私が『彼』に向かって掌を差し出そうとすると、クサカさんが慌てて私の手を払いのけ

る。

「そんな迂闊な！ 誤って噛み付かれてもしたらどうするんです」

「大丈夫です。クサカさんこそ、『彼』を刺激しない様にとっておきながら……」

案の定、『彼』は頭を抱えて、先程よりも一層小さく縮こまってブルブル震えている。

「ご心配頂くのはありがたいのですが、『彼』は今にも何かを話した気にしています。ここで何かを聞き出せば、自治領が抱えている問題を解決する手掛かりが掴めるとは、思いませんか？」

暫し重い空気が小屋の内部に張り詰めたが、クサカさんが無表情のまま私にチラリと視線を向けて一歩下がった。

「では、ご自由にどうぞ。ただし、十分に気をつけて下さい」

「ありがとう」

私はクサカさんと位置を入れ替えて一歩前に出た。

未だに鼻腔をくすぐる刺激臭は衰えを見せなかったが、しばらく室内にいた為に慣れてきたのか、私にとっては余り気にならなくなっていた。

それよりもむしろ、『彼』が何を話したがっているのか、そこばかりに興味に向いてしまった。

「ごめんなさい。脅かしてしまって。でも、あなたを傷つけようとした訳ではないの。私はただ、あなたのお友達になりたいだけなの」

『彼』は相変わらず頭を抱えたままだが、確かにこちらを見ている。

「さあ、仲直りしましょう。あなたも手を出してご覧？ 仲直りの握手をしましょう」
——お願いだから、私の呼びかけに答えて。

内心の祈る気持ちを抑えて、笑顔を浮かべて『彼』の目の前に掌を差し出した。

きっと、さっきとは見違えるほど自然な笑みを浮かべていると自分自身も感じているし、こちらが本気なら『彼』もきっとその本気を感じ取ってくれる。

「さあ」

私の呼びかけに対して、当初は強い警戒心を抱いていた『彼』だが、時間が経つに連れて次第に警戒を解いていっているのが分かった。

まだ鋭い視線は相変わらずだったが、怯えながらも私に対する好奇心も沸きつつあると聞いた所だ。

「おいで」

もう一度私は囁き、注意深く、そして辛抱強く『彼』の反応を見守った。

こういう時こそ最も焦ってはいけないのだ。

『彼』に言葉が通じているとは思えなかったが、『彼』は長年に渡って堅く閉ざされていたであろう心の扉を、私に向かって開け放とうとしているのだ。

その証拠に、私の呼びかけに答えて、恐る恐るではあったが手を差し出そうとしている。

酷く骨ばって干からびていて、爪もかなり伸びた汚らしい手ではあったが、その様なものは洗えば綺麗になる。

今大切なのは、『彼』が人間だという自覚を取り戻して、再び人として生きる道を選択するきっかけを与える事だった。

それが、現在の自治領が抱える問題を解決する最初のケースとして成果をあげれば、私が遙か極東の大地で課せられた務めも無事に成し遂げられるだろう。

「さあ、仲直りの握手をしましょう」

私は、母親が我が子に語りかける様に、出来る限りの慈しみと忍耐を持って『彼』に語りかけた。

『彼』は周囲の様子を慎重に窺いながら、私が差し出した右手の指先に触れようとしたその時、私の左腕の中でグリーンの穏やかな光が舞った。

左手に抱えていたモバイルパソコンの、メール着信を示すインジケータが点滅したのだ。

瞬間、『彼』は差し出されたままの私の手首を掴むと、そのままモバイルパソコンを抱えたままの左腕に飛びついた。

左肩の辺りに激痛を感じて『彼』を払いのけようとした時、クサカさんが背後から回り込んで『彼』を私から引き剥がし、そのまま壁に向かって叩きつけた。

小屋の外で騒ぎを聞きつけてボディガードが駆け込むと、私はクサカさんに連れられて一足先に小屋を後にした。

すぐにシェさんが後についてくる。

「だから、気をつけなさいとあれほど言ったんです。幸いにも傷口は深くないようですが、『彼』がどんな細菌に感染しているか見当もつきませんから、まず病院に向かいましょう」

傍らでクサカさんが傷の具合を見てくれているが、私は呆然としたままなす術も無くその場に立ち尽くしていた。

まさか、あそこでいきなり襲い掛かれるとは、全く予想していなかった。

例え微かな警戒心であっても、敏感な相手には伝わってしまうものだ。

自分が相手を警戒しているというのに、相手の心を開かせるなどという芸当は不可能である。

相手の心を開かせるには、まず自分が警戒心を解いて『敵ではない』事を見せてあげなくてはならないのだ。

だからこそ、反面この様なリスクは常に付きまとう。

それは予め承知していたのだが、いざ『彼』に襲い掛かれたら、頭の中が混乱してしまっても何も出来ない自分がいた。

もしかしたら無意識のうちに悲鳴を上げていたのかもしれない。

「とりあえず傷の方はそれ程酷くありませんが、シャツが破れてしまいましたね。それに、ここの住民に血を見せて刺激するのは良くありませんから、とりあえずこれを羽織っていて下さい」

クサカさんが、汚れてしまうかもしれないのに自分の上着を脱いで私の背中に掛けてくれる。

普段は滅多に表情を露わにしないクサカさんのちょっとした優しさに触れて、また、『自分は助かったんだ』と少しは実感できた事で、思わず目頭が熱くなってしまったが、ここはまだ自治領の中である以上、未だ警戒を解いては危険なのだ。

「私は先に戻っているから、中の片がついたら追いかけて来て下さい。今日の視察はこれで終了です」

クサカさんがシェさんに告げると、私はクサカさんに連れられて一足先にワゴン車へと向かった。

私も、クサカさんも終始無言だった。

「大丈夫ですか？」

時折クサカさんが私の具合を気にかけてくれるが、私の頭の中には『彼』が歯を剥き出しにして襲い掛かってきた場面がこびり付いていて、他人の声に耳を傾ける余裕は無かった。

やはり私のアプローチは間違っていたのだろうか……少なくともこれで『彼』との信頼関係を作るきっかけは永遠に失われてしまった。

『彼』が私にどのような印象を抱いたのかという事とは無関係に、私が『彼』に対して深い恐怖心を刻んでしまったからだ。

あの表情を、私はきっと忘れる事が出来ないだろう。

私に襲い掛かった『彼』の眼差しは、血に飢えた肉食獣の光を帯びていた。

(了)

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。